

# 全国中国語教育協議会

ニューズレター

第17号

2000年11月7日発行

## 中国語教育をめぐる新しい動き(第1面)

### 「会報」「研究ファイル」に奮って寄稿を(第4面)

この数年、大学における中国語履修者はやや減少の傾向にあるという。外国語科目の選択には国際情勢や両国間の政治経済関係なども反映するが、昨今は第二外国語の履修方法など制度の変更もあって、一概にその理由を断定はし難い。しかし、このような状況になると、企業でいうところのリストラ、つまりは非常勤講師の淘汰なども今後の問題となり得よう。

一方、高等学校は中国語を教える学校の数が上昇するにつれ、免許を持つ中国語教員の有無が問題になりつつある。中国語の免許を持たないで中国語を教えている者も少なくないと聞かすが、「現職教員の中国語免許取得のための単位認定講習」を、二、三の大学が集中講義・公開講座等で来年度実施を計画している。これには観国際文化フォーラムがプロジェクトを組織し関係方面と連絡をとっている。

10月末に開催された日本中国語学会の全国大会で、相原理事長が中国語学会から中国語教育の分野を切り離してはどうか、と示唆したが、研究者と自任する人も教育には従事しているはず。中国語学会自身が大会テーマやシンポジウム等で教育の問題を取り上げる試みをすべきである。

### 今からでも申し込める 月例セミナーのご案内

今年度後期の日程は12月の1回だけになりました。参加希望の方は至急お申し込みください。

(12月セミナー) 12月9日(土) 私の中国語教授法(誤用から学ぶ中国語) 國學院大学 大川完三郎氏【講師からの一言】昨年度、日本人学習者の誤用例を分析することによって、初級から中級への足がかりをつかむことを目標にした授業をおこなった。誤用の中国語をつぶさに観察すると、たしかに日本語の干渉による誤用は多いものの、「このように言うだろう」という仮説にもとづいて作られた誤用の中国語もある。ともあれ誤用分析が前車の轍を踏まない、比較的効率のよい学習方法であることは間違いない。

研修時間は午後1時半～4時半。会場は(財)国際文化フォーラム会議室(新宿駅西口、新宿第一生命ビル26F)。申し込み方法 葉書に氏名・連絡先(住所)・所属・中国語教育歴を記し、事務局へお送りください。折り返しお返事いたします。受講料は¥2,500です(受講料事前納入をお願いします)。

#### 会費納入のお願い

本会の経費は年度会費2000円と有志の寄付金によっています。今年度会費をすでに納入済みの会員には、ご協力に感謝しております。

納入が遅れている方は、会報15号とともに送付いたしました振り込み用紙で、至急お振り込みをお願い申し上げます。

#### 事務局のご案内

156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文学部中国文学研究室内

全国中国語教育協議会

郵便振替口座 00120-0-364168

なお、お問い合わせ・ご連絡等はお手数でも郵便でお願いいたします。



## 2000年暑期外国中文教師進修班

このレポートでは中国語の教育や研究に関する学会・研究会をはじめ、施設・機関などを順次紹介しているが、本号では北京言語文化大学で開かれた、今年度の外国人中国語教員研修の模様を島田亜実氏に記していただいた。

このレポートでは中国語の教育や研究に関する学会・研究会をはじめ、施設・機関などを順次紹介しているが、本号では北京言語文化大学で開かれた、今年度の外国人中国語教員研修の模様を島田亜実氏に記していただいた。

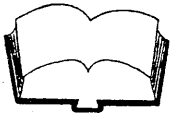
7月10日より8月5日まで北京言語文化大学で行われた外国人中国語教師の為の研修に参加させていただいた。今年は2クラスに分かれており、一つは韓国の高次教師の為のクラス（韓国では一般に高校でも第2外国語が必須で、研修に参加した教師たちは国内で選抜テストを受けてきたとのことだった。）、もう一つはその他外国人（国際）クラスで、こちらはロシア・フランス・スペイン・エジプト・インド等14カ国から、大学・高校・民間の講座など教える場も様々な人々が集まった。

私が参加した国際クラスの授業は次の通りであった。50分×2を1コマ、2クラス共通授業を“共”として括弧内に記す。 語法教学(7)・語音教学(8)・词汇教学(6共)・新词语(2共)・听力口语教学(3共)・教学概论(4共)・跨文化交际(2)・汉字教学(4)・汉语工具书介绍(2共)・汉语水平考试介绍(1共)

これら教学関係のものから、中国园林艺术(2共)・唐诗赏析(2共)・中国的佛教和寺庙(2共)のような文化紹介を合わせて13教科、45コマに及ぶ。語法教学の呂文華教授など高名な先生から直接教わることができたり、教学概論では各国での中国語学習・教学に関する情報の交換から、教材についての討論など、大変得難い有意義な研修だった。だが、難を言えば、听力口语教学以外の授業は実践的な教学方法よりも、むしろ“教学语法概论”“语音学概论”“词汇学概论”等というべきもので、「教師が身につけておくべき知識を中国で中国語で学ぶ」ことに外ならず、ベテランの先生方の授業を学生として受ける楽しみ以上には、留学経験があったり、国内で文法概論を学習した教師であれば、それほど新しい情報は得られないのではないかと多少疑問に思った。

ただこれはあくまで、漢字に対するハンデがなく、地理的にも情報量にも恵まれている日本人教師にとってはということであって、14カ国からなる国際クラスの性質上避けようがないことなのだろう。一方で、韓国人教師クラスでは、漢字教学の代わりに新聞・報道関係の文章の作文・朗読実習、また語音教学の授業でも特に韓国人の苦手な発音の矯正に重点が置かれていたり、1カ国単独クラスならではの授業が行われていた。語音教学の劉廣徽先生はわざわざ御自分の時間を割いて、国際クラス参加者にも発音矯正の機会を別に設けてくださっており、日本人クラスを望むのは贅沢な希望なのかもしれないし、また逆に日本人クラスでついつい日本語を使ってしまうことを思えば良さは半々というところかもしれない。（実際韓国人クラスの教師たちからは、つい母国語に頼ってしまうのが悩みだと聞かされた。）だが、それでもやはり、自己負担でいいから日本人教師クラスを設けてほしいというのが正直な感想だ。

自己負担という言葉が出たが、「暑期外国中文教師進修班」は、一部に自費参加の受講者がいるものの、ほとんどが国際渡航費を自己負担する以外は、滞在費・学費が免除の上2000元の奨学金を得ている。私は今回幸運にも母校で教鞭をとっていた言語文化大学の先生の推薦を得て参加することができたのだが、対外中国語教育に対する中国政府の力の入れ方には感謝を超えて脱帽するしかない。「暑期外国中文教師進修班」については一昨年も本会会員の久米井敦子先生が参加されていて、会報にもご紹介いただいているが、このような研修班があること自体、一部を除いてまだ知られていないのが現状であり、98年度の紹介と重なる部分が多いことと思うがここに報告させていただいた。〔島田亜実・日本大学(非)〕



『学ぶ』から『使う』外国語へ

——慶應義塾大学藤沢キャンパスの実践

関口一郎著 集英社新書 2000年4月

日本人は六年間も学んだ英語をなぜ使えないのか。この素朴な疑問に一つの解答と解決策を提示したのが本書である。著者の関口氏は慶應義塾大学藤沢キャンパスで、キャンパス独自の外国語教育を実践しているドイツ語教師だ。戦後の「間違っただ」外国語教育を受けた著者は、留学先でまったくドイツ語を使えない自分に愕然とし、猛勉強する。文学が専門だった彼は、この苦い経験を経て外国語教育の研究へ転向する。自ら「言語環境設計デザイナー」と称し、外国語教育の使命とは、コミュニケーションの道具としての外国語を身につけさせること、外国語教師の役割は、外国語の「知識」の教授ではなく、学生が外国語を「使う」ための「環境」を設計することと説く。ここで言う「コミュニケーション」とは単なる日常会話ではなく、「発信型」の、つまり自分の考えを伝え、討論する、自己表現のことを指す。この教育論が、留学のエピソード、著者自身のとった学習法、「帰国子女」論、認知科学概説、教育現場での体験などと絡み合って展開する。楽しい本だ。

著者は教員の連帯の重要性を説く。ある教育理論に依拠して実践し、成果を上げるには、教員の

団結と努力がいかに必要か、それは第四章を読めばよく分かる。現在の中国語教育では、一クラスを複数の教員が担当する場合、リレー式、指定教科書、ペア授業などの工夫がなされている。しかし筆者の知る限り、有効に機能している例は少ないし、同じクラスの担当者たちがばらばらに授業をしている例も依然として存在する。最大の要因は教材の欠如だろう。大量に出版されている中国語教材は、そのほとんどが「週一コマの授業向け」と称し、つまり一人の教員向けに編纂されている。チーム・ティーチングを前提とした教材がもっとあってもいいのではないか。

外国語教員は「理論家兼実践者」たるべきだと著者は言う。本書を読み終えて思ったのは、結局、体系的な教育理論に基いて教授法と教材を研究、開発する以外に道はないということだ。筆者も含めて、多くの教員はまだ「理論家」としての自覚と情熱と能力がやや足りないような気がする。外国語教育の現状に切実な危機感を抱き、努力奮闘するベテラン教員の現場の声に、我々は耳を傾けるべきではないか。

特集 月例セミナーに寄せられたご意見から(II)

月例セミナーでは、昨99年度から参加者に毎回「意見表(兼質問表)」を提出していただき、講師の報告に反映させる方式をとっているが、お寄せいただいた貴重なご意見を会報の紙面でもご紹介し、経験交流と教育研究に役立てたいと思う。紙上匿名とする点はご了承いただきたい。第2回は、本年9月実施の輿水講師のセミナーに寄せられたご意見から、以下に一部をご紹介することとした。

☆「学んで記憶する」という外国語学習ではなく、「使う」外国語学習を実現させるという、関口一郎氏の論(注:上掲書)について講師の考えを聞きたい。 [次ページ p.4につづく]

[前ページ p.3からつづく]

- ☆現在、大学における外国語教育の改革が叫ばれている。英語一辺倒の思考はよくないという意味でも、現行(40人)クラスで、成果のあがる教授法を考えていくのか、やる気のある学生を集めるために外国語選択制を導入して少人数クラス(20人)にしてしまうのがよいのか、お聞きしたい。
- ☆中級で教えるべき内容およびその方法について。1年間ひととおり初級文法を学んだ学生に対して、何をどう教えるべきか。大学の第二外国語の場合、与えられた教材(会話集、小小説など)の中から文法事項を抜き出して、プリントで復習、練習した上で教材の内容を学習しているが、学生の到達度や時間の制約などのため、復習で終わってしまうことも多く、ムダな気がして、とても歯がゆい。本当は、中国語で意見を言わせたり、会話したり、簡単な討論をさせたりしたい。
- ☆生の中国語(中国で実際に耳にする中国語)とテキストの中国語のギャップを埋めるのにどのような工夫が必要か。
- ☆文法項目として未出だが、その課の課文の自然さを保つためには出さざるを得ない文が時々混じっていたりする。授業の説明では、その時にはサラッと流しておけばよいのだろうが、教えるにくい。
- ☆セミナーでは、発音・文法・作文・会話など、それぞれの項目についてポイントを話していただきたい。

※貴重なご意見やご質問は、いずれ整理した上で、協議会の刊行物にまとめる予定です。

全国中国語教育協議会 会報・研究ファイル 原稿募集

会報掲載原稿 ①教室での工夫・授業のアイデアなど  
②教学実践記録(教案なども含む) ③国内外の中国語教育・研究関係学会・研究会・シンポジウム紹介 ④私の読んだ本(外国語教育の分野で、紹介・書評など) ⑤その他、会報にふさわしい内容の原稿。1編1千字以内。ワープロ使用を原則とする。手書きの場合は400字づめの原稿用紙使用。締切りは特に設けない。採否は事務局に一任とし、随時掲載。原稿は返却しない。

《研究ファイル》原稿 会報(ニューズレター)とは別にとじこみ式の「研究ファイル」を不定期に刊行する(年間に1回以上)。中国語学、中国語教育に関する研究論文や外国語教育に関する主張・論説を歓迎。字数は400字づめ原稿用紙に換算して20~40枚程度。形式については既刊のファイルを参照されたい。投稿は理事若干名の審査で採否を決める。原稿はワープロに限り、用紙に印字したものにフロッピーを必ず添付する。ファイルの形式はWindowsで作成されたものとし(Macintoshは不可)、できればMicrosoft Word文書ファイルが望ましい。中国語はGB、またはBIG5で入力されたもののほかに、「Chinese Writer」「Nihao Win」「cWnn」「中文起稿」等も可。今年末までの投稿分を1月に審査し、年度内に刊行予定。

◆◆活動ニュース◆◆今年度は夏から秋にかけて、協議会の事務処理が滞り会員各位にご迷惑をおかけした。会報発行の遅延もその一つ。前号でおことわりしたように、恒例の夏季セミナーも9月の月例セミナーに振り替えた。理由は簡単、事務局の業務を担当する会長が学生を引率して北京大学の研修に、島田幹事が言語文化大学の研修にそれぞれ出かけて留守だったことによる。会長は秋にも訪中した ◆◆会報はもっぱら会長の手で入力から印刷まで、その後は島田幹事も加わり発送も含めすべてを数日で処理する。外注すれば手もかからず、見やすくなるが、経費節約のためガンバッテいる。ちなみに80円切手も金券屋の3%引きを利用◆◆事務局の現状でも、現在の規模ならばなんとか手弁当でやっていける。しかし、願わくばセミナーの申し込み、会報原稿、投稿論文などが続々届き事務局の頭を痛める事態になってほしい。